多くのスキーヤーが集った

荒井山

身近なスキー場として人気を集め、ジャンプ競技発展の礎となった荒井山を紹介します。

札幌にスキーが最初に持ち込まれたのは、明治三十九年（一九〇六年）といわれています。四十一年（一九〇八年）には、東北帝国大学農科大学（現在の北海道大学）のドイツ語講師として赴任したハンス・コラーが、学生の間にスキーを広めました。

その後、単に滑るだけではなく、次第にジャンプなどのスキー競技にも関心が向けられ、昭和初期までに、当時の札幌で最も有名なスキー場だった三角山には、四十㍍級の「札幌シャンツェ」をはじめ、いくつかのジャンプ台が造られていました。

さらに、将来札幌で冬季オリンピックを開催するために、六十㍍級のジャンプ台が必要と考えられ、ノルウェーから専門家のヘルセット中尉を招き、「大倉シャンツェ」の建設が進められることとなったのです。

この時、ヘルセット中尉は、札幌シャンツェは着地面が緩く、設備が近代的ではないので、四十㍍級のジャンプ台も新たに建設すべきだと主張し、荒井山をその場所に指定しました。そして、昭和四年十二月にやぐら組みのジャンプ台が完成し、故秩父宮と故高松宮のご来道にちなみ「荒井山記念シャンツェ」と名付けられたのです。

荒井山記念シャンツェ
（札幌市教育委員会文化資料室所蔵）

昭和初期の荒井山スキー場（札幌市教育委員会文化資料室所蔵）

五年には、両宮のご来道を記念したスキー大会の会場となり、荒井山はスキー場として市民に広く知られるようになりました。また、緩急の傾斜があり広さも適当で、電車の停留所から近いという好条件もあって、荒井山を利用するスキーヤーは年々増えていきました。

一方、ジャンプ台は、三十年代まで北海道スキー連盟の強化合宿に利用されるなど、ジャンプ競技の発展に貢献しました。その名称は、改修のたびにスポンサーの名を冠するようになり、「タイムス記念飛躍台」、「森永記念シャンツェ」と呼ばれることもありました。

こうして、荒井山は札幌の代表的なスキー場となり、長く親しまれてきましたが、藻岩山や郊外に大型スキー場ができると、次第に利用客が減っていき、平成十二年に休止されました。しかし、ジャンプ台は十五年十月に改修され、未来のジャンパーたちが日夜練習に励んでいます。

（平成十五年一月号　第八十八回）